

随泉寺寺報

平成27年（2015年） 6月号 第538号

TEL.082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

門信徒講座

講師 西福寺住職 満田尊磨師

講題 『慈光に照らされて』

■浄土真宗の教え

いまから 2500 年以上前にお釈迦様によってお説きいただいた仏教は、インド、中国、そして、朝鮮半島を経て、幾多のご苦勞の中、私どもの日本に伝来しました。

お念仏の教えを日々の生活で悩み苦しむ私たち、苦しみを苦しみとも感じずにいる無明の中の私どもに、わかりやすくお説きくださったのが、親鸞さまです。

そのみ教えは、「阿弥陀さまの本願を信じ、念仏申せば仏となる」というお念仏のみ教えです。そのお念仏のみ教えは、私たち一人一人のかけがえのない人生を活かし、受け止め、生きる大いなる道です。忙しい毎日に追われ、目先のことにとらわれて、人生において大切な意味を見失っています。その苦惱の中、何ものにも妨げられることのない、力強い生き方、明るく確かな真に安心して歩んでいける道へと導いてくださる教えなのです。

6月の法座予定

- 6月 2日……………本部役員会
- 6月 14日……………掃除 長者原東
- 6月 15日朝席午前10時より……………お父さんの集い おとき
- 6月 15日昼席午後1時より……………門信徒講座
- 7月 2日午後5時より……………門信徒会本部役員会

☆ インド紀行(11) 若院 [6月]

3月7日はいよいよインド滞在最終日となりました。この日は早朝にアグラからデリーへと列車で移動し、お昼前にはデリーへと到着しました。デリーでは国立博物館へ行きました。この博物館はお釈迦様の舍利（遺骨）が展示されているのということでしたので、お釈迦様の遺骨が見れるなんてインドでしかできない体験なのでとても楽しみにしていました。博物館の中で一際目立つように人だかりができていた場所がありました。その中心に仏舍利が展示されており、沢山の人が真剣にお参りしていました。私も仏教に出会えたこと、この旅で様々な勉強させていただいたこと、感謝の思い一杯にお礼をさせていただき、インドを後に日本へと帰国いたしました。



インドは「もう二度と行きたくない」と思う人と「またインドへ行きたい」と思わせる魅力を持った国だと言われています。私は機会があればぜひもう一度行きたい、いや何度でも行って様々な歴史や文化に触れてみたいと思いました。日本では味わえないような貴重な時間を過ごすことができ、さらに仏教への味わいを深めさせていただいたインド旅行になりました。

約一年をかけてインド旅行記を書かせていただきました。長くなりましたが読んでいただきありがとうございました。書きながら旅を振り返ることができ、またインドへ行きたいな～そんな思いでいっぱいになりました。

《お父さんの集い》 6月15日午前10時より

6月の第三日曜日は父の日です。誘い合わせてどうぞお参りください。

父の思い出

24～5歳のころだったと思います。仕事で何かあったのか、失恋をしたのか、兎に角、急に実家に帰りました。と言っても福山駅からはバスが一日に2往復しかありません。電話をかけて父に迎えに来てもらったのでしょうか。福山駅から実家までは車で1時間かかります。その間、車の中で二人とも話すことが何もなく、ただ黙ったまま、フロントガラスを見つめていました。家に着いたら、母親は大騒ぎです。急に帰った息子に何か食べさそうとして、大わらわです。



父が一升瓶を抱えてきて『飲むか』と言ってコップを差し出してくれました。あの時の酒の味を忘れません。何にも言わず、何にも訊かず、しかし大きな懐で迎えてくれました。もちろん母親の手料理もおいしかったけれど。

☆浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著「あけぼのすぎ」

――浄土真宗一口法話―― 7月 (宗正元)

「凡夫の身に帰れば 帰るほど

凡夫の身の底は 深くなる」

近年、若い人々の間に、本当の自分を見つけない、今の自分は本当の自分ではないという考えがあるようです。

最近の事件をきっかけに心の闇という言葉も広がりつつあります。仏教の伝統にも、自分を見つめる、ありのままの自分を探すという考えがあります。

しかし、普通の生活をしている私たちには簡単にありのままの自分を見つめることはできません。むしろ、本当の姿を見ないようにしているのかもしれない。凡夫という言葉も、言い訳に使いがちな私たちです。

阿弥陀如来さまのお慈悲に生かされることは、自分で本当の自分を見つけるのではなく、阿弥陀如来さまに私が見抜かれているということです。ですから、良いことも良くないこともひっくるめて、いのち全体、この身をすべて阿弥陀如来さまにおまかせすることです。私の中からどんなものが飛び出しても、受け容れてくださり、支えてくださるお慈悲の中に、安らぎを得て、お互いに助け合って生きてゆきたいものです

6月 カレンダー法語

東井 義雄師

感動のある人生 「こころの味」を大切に

近頃の子どもは、私たちの子ども頃とは違った金銭観をもっているようです。「お金は生きて太っていくものだ。貸せば利子がつき、借りれば利子をとられる。その太り方は、何年かたてば、決してばかにならないものになる」と考え、兄弟でも利子を取り合ってお金の貸し借りをしているといます。

ある中学一年の女生徒は作文に「私は高校を出たらすぐ結婚する。結婚したらなるべくはやく離婚し、いしゃ料をとって貯金する」と書いたといます。

小学生の頃から、お手伝いはもちろん、弟や妹に勉強を教えるのも、テストで百点をとるのも、みんなそれが財源になるように育てられているからでしょう。

これから厳しい世の中を生きぬいていかなければならない子どもたちです。そういうがめつきも、悪いとばかりはいえないでしょう。しかし、お金に頭を縛られてしまうと、お金を超えたところにある、人生の味や、よろこびが見えなくなってしまふ危険があります。生きるよろこび、感動の味わえない子どもに育ててしまつては、とり返しのつかないことになってしまいます。そのためには、ま

ずお母さん方が、感動のある人生、こころの味を大切にしてお母さんになってくださらなければなりません。

九州で、ある女子高校生の作文をいただきました。

「母の日」

「私が母の日を意識しはじめたのは、小学校四年のときでした。一週間百円の小遣いの中から五十円出して、お母さんの大好きな板チョコをプレゼントしたのがはじまりでした。あのときは きまりがわるくて、お母さんのエプロンのポケットにねじこむなり、逃げるようにしてふとんにもぐりこみました。誰かが聞いたら笑うんじゃないかしら、そんな喜びとも不安ともつかない複雑な気持ちのまま、私はいつしか深い眠りにおちていきました。

ところが、翌朝、目を覚ましてみると、私の枕もとに一枚の手紙と、板チョコの半分が銀紙に包んでおいてありました。

「ルリ子、きのうはプレゼント、どうもありがとう。お母さんね、いままで、あんなおいしいチョコレートを食べたことはなかったよ。こんなにおいしいんだもの、お母さん一人で食べるのはもったいなくて、お母さんの大好きなルリ子にも半分食べてほしくなりました。どうか、これからも、元気で、素直な、よい子になってくださいね」

読んでいるうちに涙がこみあげてきて、あのときほど、お母さんの子に生まれてきたことをほこりに思ったことはありませんでした。あのときの感激は、生涯、忘れることはないでしょう。

というのです。ルリ子さんにこの感動を味わわせたのは、ただの五十円の板チョコの中に、どんな高価なチョコレートの中にもない味を感じとられた、お母さんのあり方ではないでしょうか。お母さんは、こうして、お金を超えた世界を、感動的にルリ子さんに自覚させられたのです。」

《平和を願う法要》 と 《本願寺広島別院・安芸教区全戦争死没者追悼法要並びに原爆忌 70 周年法要》

浄土真宗本願寺派広島別院では非戦平和を願って戦後 70 年を迎えるにあたり、来る 7 月 3 日（金）と 4 日（土）、広島平和記念公園内の供養塔前並びに本願寺広島別院において《平和を願う法要》《本願寺広島別院・安芸教区全戦争死没者追悼法要並びに原爆忌 70 周年法要》をご門主様ご親修にて厳修いたします。

その願いとするところは

- ① 戦争という人類にとって共通の痛ましい歴史を振り返り
- ② 犠牲となられた内外のすべての人々の無念の思いを心に刻み
- ③ 再び同じ過ちを繰り返さぬ決意を新たに
- ④ 次の世代へ平和の尊さを伝えていく

宗組親鸞聖人は<世の中安穏なれ 仏法ひろまれ>とのべられました。

究極の平和な世界は、阿弥陀如来の本願によって成就されたお浄土です。私たちは、お浄土をかがみとして、現実社会の様々な問題を直視し、すべての人々、すべてのいのちが、安心して共に生活できる社会、御同朋の社会の実現を目指して歩むことを願うものです。

《平和を願う法要》

1、日時 7月3日(金) 14時30分から

2、場所 広島平和記念公園 供養塔前

参拝は自由です。どなたでも誘い合わせてお参りください。

☆ 御礼

永代経懇志 金 拾万円 七竹にしき殿 故七竹則男様 特別永代経志として

永代経懇志 金 五万円 西川 邦子殿 故西川 元様 特別永代経志として

永代経懇志 金 拾万円 古堀 恭子殿 故古堀岩男様 特別永代経志として

永代経懇志 金 貳百万円 観心院釋正護 中本健一殿 遺言にて

☆ 御礼

門信徒会へ 金 一封 西川 邦子殿 故西川 元様 香典返しとして

門信徒会へ 金 一封 下垣チエコ殿 故下垣良一様 香典返しとして

いまから 2500 年以上前にお釈迦様によってお説きいただいた仏教は、インド、中国、そして、朝鮮半島を経て、幾多のご苦勞の中、私どもの日本に伝来しました。お念仏の教えを日々の生活で悩み苦しむ私たち、苦しみを苦しみとも感じずにいる無明の中の私どもに、わかりやすくお説きくださったのが、親鸞さまです。そのみ教えは、「阿弥陀さまの本願を信じ、念仏申せば仏となる」というお念仏のみ教えです。そのお念仏のみ教えは、私たち一人一人のかけがえのない人生を活かし、受け止め、生きる大いなる道です。忙しい毎日に追われ、目先のことにとらわれて、人生において大切な意味を見失っています。その苦惱の中、何ものにも妨げられることのない、力強い生き方、明るく確かな真に安心して歩んでいける道へと導いてくださる教えなのです。